



愚者の樂園

獅子文六

角川書店

初版発行

昭和四十一年二月二十日

書名

愚者の樂園

定価

一〇〇円

著者名

獅子文六

印刷所

晚印刷株式会社

製本所

株式会社 鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取
替えいたします



発行者

角川源義

発行所

株式会社 角川書店

住所

東京都千代田区富士見町二

振替口座

東京 一九五二〇八番

角 川 文 庫

獅子文六作品

悦 ち ゃ ん	160円
胡 椒 息 子	100円
沙 羅 乙 女	130円
信 子	90円
東 京 温 泉	90円
南 の 風	140円
お ば あ さ ん	160円
南 国 滑 稽 譚	70円
海 軍	140円
大 番 (上)・(下)	各160円
楽 天 公 子	110円
金 色 青 春 譜	110円
パ ナ ナ	150円
自 由 学 校	140円
アンデルさんの記	110円
てんやわんや	120円

目

次

愚者の樂園

- わが舌 (七) 日本人は勤勉か (一〇) リキ・アパート (二二) 聴視料の間
 題 (三三) ヘンな話 (三三) 帝劇追悼 (三五) ガン恐怖 (六六) 故奥村博
 史君 (七五) やき芋 (八八) 辰野さんとゴルフ (九六) 田山花袋 (一〇〇) 日本
 のチップ (一二三) カブキ役者の赤毛熱 (一三三) 当世学生風俗 (一四四) テレビ
 の前で (一五五) 箱根山のケンカ (一六六) 高級アパート (一七五) わが家の
 花 (一八三) 小ホテル (一九六) 結婚式下手 (二〇〇) 完全試合 (二一三) 黒 (二二五)
 一日の清遊 (二三四) スポーツ紙 (二四五) 南方熊楠邸 (二五五) 四面ビルも
 て (二七〇) 白人臭 (二八三) ケンカしない (二九六) 奇特な職業 (三〇六) 兄弟
 ゲンカ (三二二) ハダカ天国 (三三三) 大磯自慢 (三四四) ドジョウ食わずと
 も (三五五) 変転 (三六六) 鉄斎 (三七七) 築地移転 (三八八) オリンピッ
 ク (三九九) 老人の日の感想 (四〇九) 佐々木邦氏をいたむ (四二〇) 新美人 (四三三)
 高いバー (四五五) 菊 (四五五) 庄内米 (四六六) 「白鳥の歌」 (四七九) 「文化の
 日」 (四九〇) ミュージカル初見 (五〇〇) この狂態 (五一六) 飛ばし読み (五二六)
 糖害 (五三三) 湘南線所感 (五四四) 新年号 (五五五) 門松 (五六六) 花柳章
 太郎の死 (五七七) 七十歳も一度 (五八八) シングル・タイ (五九九) シェラザア
 ド (六〇七) 城南健児ノ (六一三) 吉原夜話 (六二五) 三矢問題 (六三五) ヤガラ
 (七六) 鐘 銭 (七七) 五輪映画 (七八) フルシチョフの写真 (七九) 世
 紀の恋愛 (八〇) 「猫」の初版 (八一) 人道無視 (八二) 京都タワー (八四)
 農地報償 (八五) アフリカ舞踊 (八六) 占領日本製 (八七) 富国他兵 (八九)
 食前酒 (九〇) 魔術師 (九一) シゴキ (九二) 京都の寺々 (九三) 真贋問
 答 (九四) 出樂園 (九五)

雑

芸術の横行	七
泣き寝入り	九
東京の空	一〇
子供を救え	一〇
なぜ純潔が大切なのか	一九
学生野球というもの	二四
正月ぐらい	二五
羽子板	二七
カルタ会	二八
新春放談	三〇
オリンピック開会式	三三
常陸宮妃のおじぎ	三四
*	
サムライ商会の主	三七
野村翁を悼む	三八

沢田美喜女史

一ファンとして

渋谷天外君

岸田今日子

横山泰三個展

中村直人君

「よみうり寸評」序

「田舎医者」序

*

丸善との因縁

大道易者

パリ時代が青春か

あらたまの球の話

ロスト・ボール

わが小唄

私の愛する詩文

「てんやわんや」

「娘と私」

*

三九

一四三

一四四

一四五

一五一

一五二

一五三

一五五

一五九

一六三

一七三

一七五

一七五

一七七

一七九

一八六

一八七

うまいもの	一八三
宮中の食事	一八四
琉球の接近	一八六
男子の料理	一九三
あのころの正月	二〇〇
食物の出世	二〇一
ナプキン	二〇四
昔の横浜駅食堂	二一〇
津つ井のオヤジ	二一一
天 政	二二三
留 園	二二三
年頭の酒	二二四
酒のサカナ	二二六
*	
紀州のメモ	二二七
大分県と私	二三二
三度目の鹿児島	二三三
フランスの夏	二三一

四季のノート

あじさい (二三) 蟹 (四〇) 月 (四三) 高尾 (四六) なべやき (四九)

年賀 (四五) 梅 (五〇) ヒナ祭り (五五) 春の旅 (六〇) 美しき五

月 (六五) 菖蒲見物 (六八) 梅雨 (七三)

あとがき

二七

愚者の楽園

装
幀

杉
本
健
吉

愚者の楽園

わが舌

昔の正月は、餅にカビがはえ、カマボコはくさるものときまっていたが、昨今はそうでないという。大変便利になったと思つたら、カビない餅も、くさらぬカマボコも、皆、有毒なのだという。

餅とカマボコばかりではない。まっ黄色なタクワン、まっ青なグリーン・ピース、まっ赤な紅シヨーガ、皆、いけないという。原色のものがいけないと思つたら、チョコレートだって、あぶないという。最も意外なのは、黒ゴマであつて、あんなもの、色をつけたつて、しょうがないと思われるが、白ゴマの方が安いので、それを染めるのだという。そして、それらの着色剤は、皆、アニリン色素で、有毒なのだという。

その他、有毒な防腐剤、着色剤、加味剤を使った食物は、私たちの周囲をとり巻いているそう
で、私にそのことを警告してくれた医者は、非毒食物の入手に、大変な手間と時間をかけてる
うである。

どうも、悪い世の中になったもので、死の商人は、兵器会社ばかりではなくならしい。私は医者でないから、有毒食物の判別に困難するが、こうなると、頼みになるのは、わが舌である。

まっ黄色なタクワンは、食べば必ずまずい。ほんとに潰けられたタクワンの味と、比べものにならない。第一、あの鮮黄色は、食物の色ではない。あんなものを食う奴が、まちがってる。有毒餅や有毒カマボコは、色がついてないが、これまた、食べば必ずまずいにきまつてる。

まずいものには、手を出さぬこと。日本人の全部が、食道楽になること。そして死の商人と戦うかはない。

日本人は勤勉か

一月四日の日に、おせち料理もあきたので、豆腐が食いたくなり、使いを出した。家人は電球が切れたといって、それを買うことも頼んだ。

すると、使いが帰ってきて、両方ともありませんという。電機屋さんは、店がしまってるし、豆腐屋さんは、六日までお休みですという。

ちょっと驚いた。私の子供のころは、二日が初荷といって、この日から商売するのが習慣だった。商店の休みというのは、元日だけだった。もっとも、二日も三日も、遊び半分の開店だったが、しかし、四日となると、マジメな商売に立ち返った。

このごろは、四日になっても、正月休みなのか。今年は五日が日曜で、四日を休むと、五日間

の連休になるから、そんな例外をやったのかも知れないが、とにかく、日本人が休み好きになった証拠となるだろう。

戦後、日曜休業が始まって、肉屋も魚屋も休みだし、ソバもスシも食えないことになった。こういう日常生活の急変は、だれも打撃を受けるはずだが、だれも文句をいわない。私はそれが不思議でならないが、日曜休業は欧米の習慣だということで、納得してのではあるまいか。維新以来、その理由の变革は、国民が反対しない風習となつてゐるのだろう。

しかし、日曜祭日を休んで、正月休みも五日間やって、その上、正月と盆のヤブイリというものがあるのは、フに落ちない。旧い休日きふが減んで、新しい休日きふが代わるというなら、理屈に合うが、どっちも休むというのは、よほど休み好きになつたのだろう。日本人が勤勉だというのは、昔の夢である。だからけしからんというのではない。

リキ・アパート

力道山も、あんなことになって、平家物語的無常を感じるが、私は人一倍なのである。彼の本拠は私の家の近くにあった。私が散歩をするコースに、彼が大きなアパートを建てたのは、三年ぐらい前と思う。本建築の堂々たる高層アパートで、彼はその Teppen の部屋に住んでるという話だった。ところが、昨年の春あたりに、その隣地に建て増しが、始まつたのである。建て増しの方が、大きいくらいな大建築であつて、私の散歩のたびごとに、外観が整ってくる。昨年の晩秋には、ほとんど工事が落成したようで、新旧のアパートを合すると、高層建築の多い、

その付近でも、まさに大景観であった。

散歩のたびに、私は、力道山もえらいもんだと感心した。不動産会社でも、保険会社でもない一個人が、ハダカ一貫の働きで、これだけのものを建てたのである。ハダカ一貫といえば、文士も同様で、もうかる点でもプロレスみたいなものだが、せいぜいベンツを買って、上流まがいの邸宅でもかまえるのが、関の山である。もっとも力道山は、レスラーであると同時に、興行元も兼ねていて、まず菊池寛という存在だが、その菊池寛が生きていたとしても、リキ・アパートのような大建築は、残せなかっただろう。

私は彼が負傷後ついに死んだ報を聞いて、すぐあの新築アパートを思い浮かべ、無常感におそわれたけれど、文士は死んでも作品が残せるからいいなぞとは、考えなかった。近ごろの大建築は、地震にも、火事にも強く、寿命からいって、作品にまさるのではないか。

力道山は強大であった。

聴視料の問題

最近、NHKに対する聴視者の文句が、新聞に出ていた。NHKのテレビを見ないで、民放ばかり見ているのに、聴視料をとられるのは、けしからんというのである。それに対して、NHK側から、非常にインギンな態度で、NHKの放送を受けうる機械的設備がしてある以上、聴視料はいただかざるを得ない法的取りきめがあると、答えていた。言葉はインギンでも、何か愉快でない内容を感じさせられた。無論、右の聴視者の文句をいれて、聴視料を免除すれば、ズルい人

間は、それを口実とするだろうから、NHKは成り立たなくなる。さりとて、広い世の中には、NHKぎりいという聴視者もいるだろうから、そういう人から、料金をとり立てるのは、理屈に合わない。法律があるからというが、そんな法律はよくない。それをタテにとって、インギン無礼の答えをしない。

しかし、この問題の解決は、たいへんむずかしいと考えるから、法律にタッチせず、聴視者の満足を得る道はないか。私は、この際、NHKが聴視料の値下げを、断行すべきだと思う。最近、地方の中継局がふえて、NHKの聴視者は非常に増加し、毎日、億という数字の収入があるという。その上、NHKの集金人は、一度に二か月ぐらい前払いを要求するから、実際にはたいへんな日銭が金庫にはいるだろう。

もう一か月三百何十円なんて、取らなくてもいいのではないか。聴視者の側からいうと、一か月百円ぐらいだと、出しやすい。百円ぐらいなら、法律をタテにとって徴集されたところで、そんなに腹は立たない。

もっとも、百円じゃデラックスの忠臣蔵は見せられないというかも知れないが、そこは、徳川家康という小説でも読んで、経営学を勉強するか。また、忠臣蔵は必ずしもデラックスでなくてもいい。

ヘンな話

私の友人の家に、中年のお手伝いさんが、通勤で働きにきていて、その女が、友人の細君にコ